

賛美の極意

(詩篇33・1〜22)

一、33篇について

33篇から聴き取るために、この詩篇を少し探ってみたいと思います。最初に気づくのは、表題が無いことです。なぜでしょうか。

その理由は、気づくことの二番目と関係があるかもしれません。それは、32篇と33篇がつながっていることです。32篇の終わりの言葉と、33篇の始めの言葉を比較してみましよう。

〈32・11正しい者たち。主にあつて、喜び、樂しめ。すべて心の直ぐな人たちよ。喜びの声をあげよ。〉

〈33・1正しい者たち。主にあつて、喜び歌え。賛美は心の直ぐな人たちにふさわしい。〉

まったく同じではありませんが、ほぼ同じです。詩篇を編集した人(たち)が意図的に、同じにした可能性が大きいです。考えられる理由として、33篇を、32篇とつながっている詩篇として読ませたかったか。あるいは、32篇の締めくくりの言葉である〈正しい者たち。主にあつて、喜び、樂しめ。すべて心の直ぐな人たちよ。喜びの声をあげよ〉をさらに詳しく展開させたのか、です。私は、33篇は、主をほめたたえることについて、展開している詩篇であ

ると受け止めています。

と言いますのは、気づくことの三番目になります。33篇が22節から成っているからです。「22」はヘブライ語のアルファベットの数です。すなわち、33篇は始めから意図的に整えられた詩篇であったと知ります。何のために整えられたのでしょうか。可能性が高いのは、教育のために使われたことです。何の教育でしょうか。神を畏れ敬い、神をほめたたえることを教える教育です。旧約の人々は、親から子へ、子から孫へ、神を畏れ敬いほめたたえることを、後代に伝えました。

気づくことの四番目は、33篇は楽器を用いて主を賛美することを教えている最初の詩篇です。2節、3節をご覧ください。〈立琴をもって主に感謝せよ。十弦の琴をもって、ほめ歌を歌え。新しい歌を主に向かって歌え。喜びの叫びとともに、巧みに弦をかき鳴らせ。〉とあります。

二、旧約の人々の賛美

こういうわけで33篇を、神を畏れ敬い、ほめたたえることを教えた詩篇として聴いてまいります。

まずは、4節、5節です。〈主のことば〉とは、律法(トーラー)です。旧約の人々にとって、律法を愛することは神を愛することであり、神を愛することは神の御意思の表れである律法を愛す

ことでした。続いて、6節〜8節です。

ここには「天地を司る神」が歌われています。〈天の万象は天の星々のことです。それらの星々は、主のために戦う兵士と考えられていたようです。〈主は海の水をせきのように集め〉は、大海が地を呑み込まないのは、主が海の水をせきのように集めていたからだ、との考えによります。こういうわけで、〈全地よ。主を恐れよ。世界に住む者よ。みな、主の前におののけ。〉と賛美を献げています。続いて、9節〜12節です。ここには「主が諸国の民の神である」と歌われています。古代、どの国にも守護神が祭られていました。ですから、イスラエル以外の人々がイスラエルを見るなら「イスラエルの人々が信じている主なる神だ」となるわけです。一方のイスラエルは、主なる神がイスラエルだけの神ではないと知っています。神はおひとりしかおられませんから、諸国の民の神でもあると知っています。ゆえに、12節の言葉、すなわち賛美に導かれます。続いて、13節〜15節です。ここには「一人ひとりの神」が歌われています。その場合の一人ひとりとは、もちろんイスラエルだけではなくあります。異教の人々も含めてです。続いて、16節〜19節です。ここには「主を畏れる者たちの神」がうたわれています。私たちは、どうすることもできない状況に追い込まれることがあります。あるいは、

自然災害によって命や財産を一瞬うちに奪われることも起こります。ですが、18節にありますように、〈主の目は主を恐れる者に注がれる〉のです。こうして、20節〜21節において、神への信頼を力強く告白しています。

三、教会の賛美

詩篇は教会の賛美にもなりますが、私共が詩篇を賛美として歌う際は、工夫が必要かと思えます。一つは、神であり、救い主であり、仲保者でもあるイエス・キリストによって、旧約に書かれている賛美の言葉が——その最たるは詩篇ですが——、教会の賛美になることです。私たちはイエス・キリストによって、旧約聖書に書かれている祝福がごとく自分たちのものになったと知るべきです。もう一つは、教会には教会独自の賛美が必要だと言うことです。それはかなり早い時期に生まれました。新約聖書には、当時教会でうたわれていたと思われる賛美歌が書かれています。例えば、ピリピ人への手紙2章6節〜11節、テモテへの手紙1章16節のカギ括弧部分、ペテロの手紙1章22節〜25節の中に、です。

賛美は、旧約の時代から始まり、イエス・キリストを信じる私たちに授けられている賜物です。うたうことにより、歌詞から、理屈抜きにたましいに入ってくる。これこそ、賛美の極意です。